京都大学経営管理大学院
Graduate School of Management, Kyoto University

KAFM-WJ 001

AKB48にみるインテグラル型サービス特性

前川　佳一

2012年1月31日

AKB48にみるインテグラル型サービス特性

2012年1月31日
京都大学大学院経営管理研究部
前川　佳一

ものづくりの世界には、製品アーキテクチャなるコンセプトがあり、次のように定義される。「システムとしての製品をどのようにサブシステムへ分解して、いかにそれらのサブシステム間の関係（インタフェイス）を定義づけるかに関しての設計思想」(Baldwin and Clark、2000)。この製品アーキテクチャは、次の2種に分けられるという。まずモジュラー型アーキテクチャでは、「それぞれの部品つまりモジュールが自己完結的な機能を持っているため、あらかじめ別々に設計しておいた部品を事後的に寄せ集めて製品を組んでも、全体として立派な製品となる」(藤本、2004、p.128)。これに対してインテグラル型アーキテクチャは「モジュラー製品とは違う、機能と部品の対応関係が非常に錯綜している製品」であるから、たとえば「…数多くの部品の間で、設計パラメータをきめ細かく相互調整した結果としての微妙なバランスが、トータルシステムとして車の乗り心地を実現する」としている（藤本、2004、p.129)。そうして、日本のものづくりが世界を席巻したのは、インテグラル型の製品、自動車やハイテク家電において日本的「擦り合わせ」技術を磨いてきたからだと考察する。これに対しモジュラー型の利点を生かしたのは、米国では例えばデルコンピュータやアップルは設計（モジュラー部品の組み合わせ）に専念することができ、中国は大量生産能力でその設計の製品化を分担したとする。

シンプルな割に説明能力の高い上記の考え方をサービスにも敷衍することは可能だろうか。まずはごく単純に上の製品アーキテクチャの定義を「製品」から「サービス」に置き換えることを試みるが、同時に視点を変えて、「分解」ではなく「統合」のプロセスとして記述すると次のようになる。「サービスアーキテクチャとは、パーツであるサブシステムを統合して、いかにそれらのサブシステム間の関係（インタフェイス）を定義づけシステム全体としてのサービスをどのように構築するかに関しての設計思想」。こうした考え方がサービスでも成立すると仮定して、かつ前述のモジュラー型/インテグラル型の対比をサービス分野でも考察するのが本稿の目的である。

以上の前提を置いたときに、AKB48は典型的な日本的インテグラル型アーキテクチャの例であると考えることができる。しかもそれは入れ子構造になっていて、メンバー個人もAKB48全体も、ともにインテグラル型と見なすことができる。以下、これらの点を説明する。

まず個人のレベルの例として、指原莉乃を採り上げよう。「指原は、自分に自信がありません。歌もヘタだし、ダンスもヘタだし、可愛くないし…」これは彼女が、2011年の第3回AKB48選抜総選挙にて前年の19位から9位へと大躍進を遂げたときに、ステージ上で嬉し涙にくれながら語った言葉である。謙遜のように聞こえるかもしれないが、おおよそ当たっているというのが、指原個人のファンでさえ認めるところだ。「ヘタ」は言い過ぎにしても、ダンスも歌もAKBメンバー50名あまりの中で、上位かどうかはあやしい。「可愛さ」についてはデビュー当時よりも格段に向上したという見方が大半ではあるが、それにしてもやはりAKBの中でも、総選挙の下位のメンバーでさえ、もっと正統派の美形はたくさんいる。「AKB48とは指原莉乃の“奇跡”のことである」とは、2012年1月に発売となった彼女のはじめてのフォトブックの表紙に寄せた、AKB48総合プロデューサー秋元康の言葉である。ダンスも歌もルックスも凡庸で、しかもネガティブ思考のいわゆる「ヘタレキャラ」の指原が、AKB内の数多のライバルを押しのけて毎年総選挙順位を上げている、この事実をして、秋元康は「奇跡」と呼ぶのである。彼女が支持を集める要因のひとつに、ブログで示す文才（プロの放送作家でもある秋元康をして、「面白い文章を書くからアイドルをやめて放送作家になったら」と言わしめている）や、トークの面白さも大きな要因ではあるだろう。しかし、ダンスも歌もルックスも、それぞれのパーツとしてみれば不完全であっても、それらをくるむ自虐的でコケティッシュなキャラクターと相まって応援せずにはいられない、そんな存在が指原莉乃である。

このあたりの事情は、ブレイクしはじめたときの指原の煩悶からも伺い知れる。冠番組ができ、昼の人気帯番組に出演し、ソロデビューが決まり、ドラマ主演が決まりと、他から見れば順風満帆であっても、彼女は「ヘタレキャラ」ゆえに愛されている自分を誰よりも認識していて戸惑いを隠せない。つまり、何をやっても結果を残せないヘタレだからこそ「ガンバレさしこ！」と応援してもらえたのに、次々にステップアップしていく姿は、かえって古くからのフ

ァンを遠ざけるのではないか、と。それは一部の熱心な支持者であった人たちには当てはまるのかもしれないが、今のところ、この「不完全パーツの集まり」は順調に人気を拡大しつつある。

指原以外にも、構成メンバーのひとりひとりが今は不完全な存在であることを示す発言を拾ってみよう。高橋みなみも同じく 2011 年の第 3 回 AKB48 選抜総選挙で名言を残している。「努力は必ず報われると、私はこの人生をもって証明します」。高橋は、AKB48 にいながら「歌手になる」という自分の夢を叶えたい、そのための努力をし続けていくのだという。AKB グループ全体のキャプテンらしい、たくましく、しかし謙虚な宣言だ。

次に、AKB48 がグループとして相乗効果を発揮している、いわゆるインテグラル性をみていこう。まずはやはり 2011 年の第 3 回 AKB48 選抜総選挙からで、前年の雪辱を果たしたかたちで首位に返り咲いた前田敦子は振り絞るように次の言葉を叫んだ。「私のことが嫌いな方もいると思います。でも 1 つだけお願いがあります。私のことが嫌いでも AKB のことは嫌いにならないでください」。これは多くの支持を獲得することはすなわち、ライバルとなるメンバーのファンがいわゆる「アンチ」となることを見越した言葉でもある。不動のセンター（ポジション）をつとめ、ある種カリスマ性を身につけてきた前田も、グループとしての総合力を自覚しているのだ。

前年の首位からひとつランクを下げた大島優子は、誰もが認めるオールラウンダー。歌唱力こそ AKB 内でも平均以下だが、キレがあり小さな体いっぱいに躍動するダンス、子役時代から培った演技力、コメントがスポーツ紙の見出しにそのままなると言われるユニークさ、アイドルにあるまじき変顔や動物ものまねのパフォーマンスのクオリティ、AKB で一番と言われる運動能力などなど、明らかに前田敦子とは異なるアピールポイントを多々持つ。

ルックスでは小嶋陽菜。同性のメンバーからもラブコールや羨望のまなざしを多数受ける。長身でスタイルも良いのだが、しゃべり方の幼さや発言の無責任さが、かえってギャップ萌えを誘う。

AKB48 内最年長の篠田麻里子は長身でモデル体型。その美貌に魅かれるファンも多いが、トークでは無茶ぶりや大ボケと言う別の破壊力を見せる。

…という風に挙げていけば、当然 48 人（+α）のメンバーの個性を書き連ね

ることとなる。本来、「推しメン」という、ご贔屓を一人持つのが正しいファンの姿であるとされる一方で、「推し変」も容認されれば、最近では「DD（誰でも大好き）」という姿勢も許容される。すなわちこれだけの際立った個性を持つメンバーが集まっていて、彼女らが無邪気に絡み合う様や熱く闘う姿がさらけ出される。たとえば 1 月 27 日全国公開となった映画「DOCUMENTARY of AKB48 Show must go on 少女たちは傷つきながら、夢を見る」は、凄まじい舞台裏も赤裸々に映し出す。そうしたものを目にすると、グループ全員が成長していく歩みそのものを応援したくなる。これこそが、秋元康の設立当初からのねらいである。曰く、「25 年前に『おニャン子クラブ』というチームを全国優勝に導いた監督が、久しぶりに秋葉原にできた新設校に、監督として迎えられた。選手に『みんな頑張れ、甲子園目指すぞ』と、言ったものの、集まった選手は野球をやったことがない子たちだった。その弱小チームの孤軍奮闘のドキュメンタリーが AKB48 なんです[1]」。すなわち、不完全な個人の集まりであるグループ全体としても未だ不完全であり、成長を続けている途上である。

このインテグラル型の対極、すなわちアイドルグループのモジュラー型と考えてよいのは、韓国のグループではないだろうか。少女時代にせよ KARA にせよ、フォーマットは定まっているように見える。すなわち、まずスタイル、顔が非凡なメンバーを集め、歌とダンスの完成品を客に魅せる。そこには、成長過程を見守るファンという図式は存在しない。まさしくモジュラー型の特徴、「各部品が自己完結的な機能を持っているため、寄せ集めて製品を組んでも、全体として立派な製品となる」姿がそこにある。

参考文献

Baldwin , Carlisss Y, and Kim B. Clark (2000), *Design Rules: The Power of Modularity, Vol.1,* Cambridge, MA: MIT Press.

藤本隆宏（2004）「日本のもの造り哲学」、日本経済新聞社.

---

[1] 産経ニュース 2011.11.6
http://sankei.jp.msn.com/entertainments/news/111106/ent11110613020005-n1.htm
（2012 年 1 月 31 日アクセス）